小池辰雄著作集 第七巻 『聖書の人ルター』

第一部　ルターの劇的生涯

# 【目次】

**二二　ルターの結婚**

●十二の空樽　●カタリーナ・フォン・ボーラ

**二三　ルターの家庭生活**

●修道院がそのまま家庭団欒の場　●彼のセレナーデは讃美歌　●子どもは三男三女　●次女マグダレーネ

**二四　ルターとエラスムス**

●文芸復興　●人文主義　●エラスムスとルター　●「自由意志論」と奴隷意志論

二二　ルターの結婚

# ●十二の空樽

修道院への道は、必然独身への道であった。ひたすら神に仕え、人に奉仕する特別な道であった。修道院の中で福音を新たに把んだルターは、福音は結婚に対しても自由であることを知った。結婚もまたそれによって神の栄光を現わすならば、神聖なるものであることを悟った。その意味においてキリストは結婚を祝福されたのであった。

農民戦争の戦火を背景としながら、結婚に踏みきったルターの劇的な結婚をこれから観たいと思う。

ライプツィヒの南西、馬車で軽く一日路なるニンプシェンという村里に尼院があった。そこへは地方の貴族の娘たちが、大方は家庭の事情などから入れられる風習であった。彼女らは環境と運命の犠牲になっている者が多かったわけである。そういう尼院は勿論此処に限られていたのではない。ところでこの尼院の院主は当時やはり婦人で、尼僧は五十余名であった。改革の嵐が吹き、この尼院の窓を揺り動かすまでは彼女らは日毎の勤行にいそしみ、中世的な敬虔にひたり、そこに信仰生活の純粋なものがあると考えられていた。しかし、なかには自己の意志で尼僧となったのでない自分達の運命に疑念を起こしする者もあり、脱出を願う者もないではなかった。然るにルターの著書に接し、言説を伝え聞くに及んで、彼女らは結婚の神聖、家庭生活の祝福、職業と信仰生活の関係等につき聖書に基づく健全な思想を教えられ、殊に『修道僧の旧約に就て』なる小論は、彼らに行動の自由を悟らしめ、尼僧たるの運命に抗して新しい自由の天地で、真の信仰生活を営みたいという願望を燃やしたのであった。

１５２２年のことであった。この尼院から程遠からぬグリンマのアウグスティヌス派の修道院の院主が、数名の修道僧と共に自ら誓約を破棄して還俗したのである。この脱走院主の親戚関係にあたる婦人が二人もニンプシェンの僧尼の中に居たので、この敢行が僧尼たちに影響するところは大であったと思われる。しかし彼女らは独力でかかる行為に出ることが困難であるから救援をルターに求めたのであった。ルターはこれに対して責任を感じ、然るべき方途もがなと想いめぐらしていた。

１５２３年四月始めの或る晩のこと、月の出もおそい夜陰に、一つの僧房の窓からあやめもわかぬ紬衣をまとった影が一つ二つと数えて十二、相継いで庭さきに降り立った。彼女らは一人の屈強な男に助けられて次ぎ次ぎと塀を乗り越えてしまった。このが終るや、塀の外に待ち構えていた田舎馬車は十二の空樽に文字通りならぬ人魚を満たして動き出した。夜はほのぼのと明けてゆく。彼女らは樽の中で不安と希望の脱走路を車輪の音を耳もとに聞きながら急ぐ。三日路の後にこの積みなれぬ荷を積んだ車はヴィッテンベルクに着いた。この車を迎えたのは誰あろうマルティン・ルターであり、商用にことよせて空樽を用意し、密かに尼僧たちを伴れ出したのはルターの依頼を受けたトルガウの町の商人で且つ評議員であるレオンハルト・コッペであった。墨染の衣の十二人の中にはマグダレーナ・フォン・シュタウピッツ（ルターの魂の苦悩の日に霊的な慰めと助けを与えた恩師シュタウピッツの姉妹）と、やがてルターの生涯の伴侶となるべきカタリーナ・フォン・ボーラ（Katharina von Bora）とが混っていたのである。勿論ルターは夢かかる女性を救い出したとは想っていなかった。

脱出尼僧十二名中三名はザクセンの親族へ復帰し、残る九名の中六名も程なく親戚知友の許に引きとられ更に三名の中二名は暫らくルターの親友の画家クラナッハの許に寄寓することになり、最後の一名カタリーナはフィリップ・ライヘンバッハという弁護士の家で世話になることになった。ルターがしかし十二名の尼僧の脱出を援助し、れ夫れ責任をもって然るべく面倒を見たことに対しては、やがて世間からの非難やの風評を立てられもした。しかしそんなことはルターのにもかからぬつまらない非難でしかない。ルターは修道院における敬虔生活よりも、健全な市民の健全な家庭生活に移すために骨を折ったのであった。

# ●カタリーナ・フォン・ボーラ

ルターは司祭や修道僧にもすでに結婚を奨めてきた。リンク、ブーツァー、カールシュタットという連中はいずれもルターの勧告によって結婚したのである。彼自身は自分の結婚については未だ考えるをたなかった。カタリーナという女性はヴィッテンベルクでバウムゲルトナーというヴィッテンベルク大学出身の青年と相思の仲になったと言われる。しかしこの青年はニュルンベルクの名門の息子であって、多分カタリーナの如き脱出尼僧と結婚することを家族の者に反対されたので、一年半の月日はいたずらに不調の中に過ぎていった。ルターはこの二人の結婚を出来れば成就させたいと同情していた。それで、この青年に書き送って「貴兄がもしカタリーナ・フォン・ボーラをわがにする意志がおありなら、急がれたら可いでしょう。でないと彼女はこの界隈の者に取られるおそれなきに非ずですよ。彼女は今もなお貴兄に対する愛を棄ててはいないと思われます。私は貴兄らが一体となられることを真にお慶びするのですが」。折角のルターの奨めも竟に果を結ばなかった。しかし清いはルター夫妻とバウムゲルトナーの間に終生続いた。

ルターがこの友人にほのめかした求婚者はヴィッテンベルク大学教授カスペル・グラーツであった。しかしこれはカタリーナの方から断った。彼女はマグデブルク市の教会牧師ブルターの親友であるアムスドルフに無邪気な気持で、自分の意中を述べて、アムスドルフでもルターでも、どちらから申し込まれても辞さない旨を告げた。アムスドルフは独身を貫こうとしていたので、このはなしをルターに伝えた。

ルターは正直のところあまりカタリーナに心を引かれなかった。彼女は少し高慢なように見えた。知性の勝った女性のように思われた。彼女は時に二十六歳。その輝かしい黒い瞳、秀でた白い額、端麗な容姿はしかし犯すべからざる気品を表わしていた。彼女は１４９９年にマイセン地方の一貧乏貴族の家に生れ、両親はその養育費に窮し、十歳の彼女を尼院へ送ったのであった。二十四歳の春、出尼院まで十四年間の乙女時代を静かな尼院に明け暮れたのである。しかし尼院の壁は冷たくあった。その空気は宗教的ではあっても、福音的ではなかった。福音の性格は自由であり、生命に満ちている。人間性を徒らに拘束する宗教的なものが真の敬虔ではないことに彼女が目覚まされたとき、彼女の抑圧され、窒息しそうになっていた青春の生命は罪からの解放と同じく尼院の壁からの解放を願ったことは当然の勢であったといわねばならない。彼女は確かに優れた女性であった。ヴィッテンベルクにこのようにして滞留している間に彼女の存在はその上流社会に認められるようになってきた。彼女がクラナッハの家に寄寓していたとき、デンマルク王クリスチャン二世がこの画家を訪ねたことがあったが、その時、カタリーナは金の指輪を贈られるほどであった。

ルターは１５２４年１１月にスパラティンにこんなことを書き送っている。「……私は神の聖手の中にある。神は何度でも私の心を変えることができる。毎時間、否瞬間ごとに生殺与奪し給うことも神の聖旨のままである。しかし私が現在の気持を有ち続ける限りは結婚しないだろう。……私の心情は木石ではないが唯この場合どうしても結婚する心持ちになれないからである。それは私が日々、異端者として処刑され、殺されることを予期しているからである。私はこのこと〔結婚〕のために、私に委ねられている神の業に制限を加えることをまないのである。……」

しかし１５２５年４月、農民戦争の戦火の燃えている頃、ルターはスパラティンにこう書いた、「貴君はなぜ結婚するように手筈を進めないだろうか。私は多くの論拠から他人に結婚を奨めている。私もようやく結婚を断行しようという気持になって来た」。それから数日経って、彼は彼一流のユーモアを交えてこう書いた、「……しかし貴君がもし私に例を示せと言われるならば、私は著しい例を示したように思う。それは私がすでに妻たるべき三人の女性を同時に有ったことがある。私は彼らを熱心に恋したが、そのうちの二人は他の良人に嫁したので、私は失恋の恨みを呑んだ。第三番目の者をやっとわが左腕に擁しているが多分またこれを失いそうだ。君はなかなか気の永い恋人であるから、ことによると、一人の妻の良人になることすらないようだ。だがねえ、結婚すまじと決心していた私が、貴君が思いがけなくも婚約することになろうと予言しているのだよ。神は実に人の夢想もしないことをしでかし給うのか常であるからね。……戯談はともかく、貴君が想って居られるところを実行されるように、貴君に勧めたくこう申したのです」。

# ●ルターの結婚

農民戦争の戦禍のおさまらぬ１５２５年６月１３日、火曜日の夕、ルターはカタリーナとヴィッテンベルクの修道院で突如結婚式を挙げた。式の参列者は極めて少数であった。すなわち城教会の執事、市の教会牧師、法科の同僚アベル、画家のルカス・クラナッハ夫妻のみであった。

この式後二週間、６月２７日に、公開の儀式を市の教会で、祝宴を修道院で催した。この時は両親を招き、友人たちを呼んだ。その時の彼の招待状はよく彼の胸中を表わしているから、ここにその一部分ではあるが、紹介したいと思う。

マンスフェルト市参事会員ヨハン・リューヘル及び二名の評議員へ、

「敬愛する各位！　私が農民に反対した文書により如何に強硬な反対の叫びをき起こしたかは兄等の御存じの通りです。神が世界のために私を用いてなし給うた聖業は皆忘れ去られました。貴族も僧侶も農民も、誰も彼も今やって私に反対し、私を脅かすに死を以てしています。私はすべて覚悟しています。彼らがこれほどまでにもの狂ほしく、愚かであるから、私は死ぬ前に、神から命ぜられたままの生活に入ろうと決心しました。

また出来るだけ、教皇の支配下の旧い生活様式（修道僧的独身生活）を脱し、世人をして一層狂且つ愚たらしめようと心を決めました。これは私がこの世と訣別する置土産です。神がそのうちに私にその恩恵（召天）を与え給わんことを予知しているからです。それ故、私はわが愛する父の願望に従って結婚しました。口しい連中に妨害されないように、急いでこれを断行しました。来週の火曜日に小祝宴を催したいと思います。……国内は今擾乱の最中ですから、私はいて貴君の御来臨をがうことを敢てしませんが、もし貴君が自ら都合して御下され、且つわが愛する父母をも御同伴下さるなら、私は本当に有難いと思います。……こちらは貧しいけれども、もし貴兄が同道したいと思われる善き友人がおありでしたら、私は欣んでその人々にお目にかかりたいです。……」

アムスドルクに宛てたこの書状によって見るも、彼が結婚を一面には父から勧められたこと、そして彼は父の願いに従って親を欣ばせたかった心根もあったことが充分わかる。結婚は、彼にとってこの度は瞭らかに神の意志であり、彼の福音に対する実践であり、父母の願望であった。

コッペに宛てた手紙の冒頭に彼は言う、「突然且つ意外にも神は私を聖なる婚姻の綱を以て捕え給うた」。

実に修道僧ルターと修道尼カタリーナとの結婚は福音の戦に花冠に添えたものであった。この福音的根拠に立つ実践実証なくしては、健全な社会を構成すべき健全な家庭の福音的顕揚は危いのであった。

しかしルターのこのセンセイショナルな結婚はち評判となり、敵側の悪宣伝の好資料となり、あらぬまわしき風評がされた。しかしルターのはいうまでもないことであって、彼らの風評は却て淫らな悪修道僧や尼僧の現実を自ら曝露するまでのことであった。唯だしかし彼が結婚した時期は常識的に考えるとの非難をるのも一応もらしく思われる。即ち農民戦争の深い関係者責任者という地位に在る人物と一般には見なされても仕方のない彼が、その戦乱の炎なおらぬ折に、またルターにとっては恩愛の君主フリードリヒ選帝侯のじて後一ヵ月程なる悲しみの涙渇かぬ時に、突如結婚するが如きは、常軌を逸した仕打ちではないかと責められたわけである。然り、まことに常軌を逸している。しかも逸せざるを得なかったのである。農民戦争のたる現状を目撃し、その渦中に在って彼はいつ刺客に襲われぬとは限らないと覚悟していたことは明白である。そのことは彼に福音的な結婚の実証を迫る重大な契機であった。い彼が理論的にはそれほど意識的に跡づけなかったとしても。またかの十二人の尼僧の中、唯一人残ったカタリーナの始末について責任を感じていた彼として、彼女の運命が謂わば宿命的に、摂理的に自分に振りかかって来るのを感得した瞬間、彼の如き性格の人として即決断行する気になったのはむしろ自然であったと思われる。また両親の願望を一日もはやくそれによって満たし得ることも、血あり涙ある彼の喜悦であったに相違ない。また修道尼たちとルターとの間の兎角の風評を結婚によって吹き飛ばすと同時に、結婚によって更に嵐にまで吹き立てることも、彼の痛快と感じたことであろう。

さまざまな素因が相誘発して彼の心に迫って来たとき、彼はその最後的決意を福音という太い線上でなしたことだけは疑う余地なきところである。神が突如自分を婚姻の綱で捕え給うたという上掲の告白はかかる消息を表現したものと信ずる。ルターの改革事業は、この結婚とこれに続く家庭生活を以て一つの美しい華を咲かせたと見てよいと思う。その名誉の一半は敬虔な妻カタリーナに帰すべきである。われらはすでに福音のためにめざましい戦を戦ったルターが、歓びの野辺、憩いの水辺、祈りの森、讃美の幕屋として与えられたこの婚姻に対して心から一つの聖句を贈りたいと思う。

「われエホバを大いに歓び、わか魂はわが神を楽しまん。

そは我に救の衣を着せ、義のをまとわせ、

新郎が冠を戴き、新婦が玉黄金のをつくるが如くしたまえばなり。」

 （イザヤ61･10）

二三　ルターの家庭生活

# ●修道院がそのまま家庭団欒の場

ワルトブルクの城からヴィッテンベルクのに降りて来てルターのった処は修道院であったが、彼にとってこの修道院はそのまま家庭の場所となった。四十人の修道僧を収容したこの僧院も還俗続出のため１５２３年には、院主ブリスガーと彼のみになった。ルターは結婚までは院則を遵り修道僧としてなすべきをなして来た。敵や味方の非難批評に対して彼が応えた態度は、飽くまで自己をいつわらざる真実と自由、神の聖旨に従う必然に拠らんとした。

パトス（情熱）なきロゴス（理念）の表現は形骸に堕し、ロゴスなきパトスの実現は幻想に浮く。ルターの修道院的敬虔の否定から、家庭生活を基体とした市民生活への移行は実にキリストのロゴスをキリストのパトスで生きることにあった。そこに福音的エトス（倫理）が実践されてゆく。然らばそのような現実への原動力は何であるか、聖霊である。聖霊なきところにこの構造の実質は硬化しパリサイ化する。ルターはその間の消息を体験をもってわきまえていたはずである。

彼は修道院という建物そのものにわることなく、建物をむしろそのまま福音的な家庭の在り方で謂わば曠野の幕屋となしていた、といったらいいだろう。フリードリヒ選帝侯は庭園付きでこのをルターに贈与されたのであった。

修道僧としてのルターは結婚と共に終りを告げ、彼は大学教授としての公職とその俸給によって生活することになる。今までは俸給は受けていなかったのである。

ルターの著書を出版した者らは巨額の富を作りながら、ルターに印税を払うこと僅少で、著者は貧しいという奇現象であった。ヨハン選帝侯はルターの功績に報いるために贈物をしばしば恵与したが、ルターはむしろ心苦しく思い、恩寵を受くべき者が他にあると言って、過分なことは辞退したき旨をしばしばした。ルターが立派なものを身に着けることがある場合は、みなのものか、彼の敬慕者からの贈物であった。それは好意を全然無にしては済まないという気持からであって、彼自身は身なりを一向頓着しなかった。困る者があれば、金銭でも衣類でも器具でも惜しみなく与えた。ある時学生が病身の両親を見舞いに帰郷したかったが金がなくて困っていた。ところがルターにも金がない。ふと彼は友人が贈ってくれた銀盃に思いあたった。「君、銀盃があったよ。こんなので飲んだことがないから僕は要らない。これを金細工師へもってゆきたまえ、買ってくれるだろう。そうすれば旅費は充分出来るよ」といって、くれてしまった。それは実に立派な銀盃であった由。物質に淡々たるルターはこんな調子であった。もし彼が侯に乞うたものがあったとすれば、それは祝宴などで人々を歓ばせるための葡萄酒や鹿肉などの酒肴類であった。ものごとに屈託なく、人情にい彼はされ易く、しばしば馬鹿を見ることがあった。彼は自らそのことを嘆きつつも、かれることは光の子の幸として、この世の子らの如く賢くなろうとは夢想わなかった。ルターの貧乏性に外側から歯止めをかけて、家計をたてたのは賢妻ケーテ（カタリーナの愛称）であった。

彼の無頓着さはその書斎にも見られる。書籍と原稿用紙と書類とは狼籍と置き散らかされて、足の踏み場もない有様であるのは珍らしくない。独身時代には彼はいわゆる万年の敷きっぱなしで、メランヒトンも眉をめざるを得ぬ無精振りであった。こんなことを曝露すると、読者の中には、わが意を得たりと思う青年があるだろう。善い哉！　ただしルターの如く真剣に生きよ。彼にとっては福音の真理が生活の一切で、これと取っ組んで明け暮れ、「醒めて想いねて夢みる」ものは唯だこれ「神の国と神の義」であったし、敵はサタンとローマであったから、その他のことはどうでもいい問題であった。食事の不規則も結婚後と雖も必ずしもなおらなかった。仕事に熱中するときはしばしば眠らず、しばしば食べずに続行した。また、食べるとなると、暴飲暴食こそしなかったが、相当妻君をてこずらせた。彼は生粋のドイツっ子で、よく食べよく飲んだ。ビールも葡萄酒も彼は好きであった。しかし平常は粗食に甘んじ豊かにも乏しきにも彼は感謝した。いじけた律法的な敬虔でなく、自由な福音的敬虔の豊かさであった。

# ●彼のセレナーデは讃美歌

遊戯も運動も舞踏も結構であるとした。将棋も一廉の腕前があったという。彼はまた庭さきに薔薇と百合を栽培してこれをでた。この二つは特愛の花であった。しかし彼は楽しみを私しなかった。神において在る者らしく無邪気な清朗な歓喜を享受したのである。「私は庭さきに植木し、堀池をつくりました。両方ともうまくいきました。お訪ね下されば、私たちは薔薇と百合の花で貴兄に花環を編みましょう」とスパラティンに書いている。このような気持で人々と楽しみを共にしたのである。ルターは福音的な健全な家庭の実をおのずからしていた。

結婚についてルターはこんなことを『卓上談話』（《Tischreden》）の中で言っている、

「婚姻は神の秩序である。もし結婚がなかったら、世界ははやくも荒れ果て、すべての被造物は無となり、神の創造も徒労に帰したであろう。アダムにエヴァが与えられたとき、アダムは聖霊に満たされ、彼女に美しい名を与えた。エヴァとはすべて生けるものの母という意味である。……彼女は生きとし生けるものの泉であり、根源である。エヴァという言は短い言だが、彼女への素晴らしい讃辞である。……われらの最初の父祖アダムによって語られたこの言葉は聖霊による。この聖霊の言は婚姻をかくも美しく定義し讃美しているではないか。……」

彼は音楽を特に愛した。シュパンベルクの有名な画が示してくれるように、彼は自作の歌曲を家族の者たちとで歌った。彼のセレナーデは讃美歌であり、彼の恋人はキリストである。彼ほどイエス・キリストが力強い万軍の主であると同時に一切の罪と弱さをどん底から荷なう贖主であるとして、キリストに酔うた人が幾人あるだろう。彼にとってサタンは罪への誘惑者、ゲヘナの実在者であった。現代人にはこのような霊界の現実がわからないから、即ち信仰が観念的になっている場合が多いから、ルターが如何にサタンと戦ったかは解し難いのである。そのサタンと戦う武器として彼は神の音楽を最善のものとした。

最も福音的にイエスの降誕節を迎えたのは、従ってやはりルターであった。ルターのクリスマス讃歌はあまりにも有名である。ドイツにおけるヴァイナハテン（クリスマス）の福音的な祝祭は素朴で独特なをもっている。あれはルター気質に発しているからであろう。

開放的な彼は学生たちを宿泊させていた。遠近から彼を敬慕して訪ねてくる者も多かった。修道院時代と同じように、彼の家は旅人の、困って彼を訪ねる者たちのおやどであった。イギリスのゴルドン将軍もそうであったように、彼らは自分の家を神の幕屋としたのである。学生たちとはよく食卓を共にした。その『卓上談話』が遂にあの大部な語録を編み成すに至った。彼の自然の会話があのように福音的であり、色とりどりの真理の小花をき散らしたようであるのは、一種の驚異と言わねばならない。彼は木当に聖書の言を底の底まで自分の言にしていた人である。ルターを「聖書の人」と呼ぶとき最もよく彼の本質を表わすと思うので、この書の題名とした。預言者エレミヤが告白しているように、彼も聖言に酔っている人であった。しかも聖書的、福音的ということと、人間らしさとドイツ的ということが渾然としていた彼である。福音的という神の普遍性は、独乙的という人間の特殊性を通して、真の人間、歴史的、地理的、民族的な具体的人間を創造し形成してゆくのであった。このことはあらゆる人種において真理である。我ら日本人の心臓も福音というＸ線を通して始めてかの日本刀の素晴らしさよりも、かの大和魂の美しさよりも、素晴らしく、また美しきいのちあるものとなるのである。

# ●子どもは三男三女

さて我々はルターの子らについて伝えられているところの一端を学ぼう。

１５２６年６月に長男ハンス（Hans）が与えられた。満四十三歳になって始めて子を有ったルターが、どんなにこの小さい子を喜び、感謝したかは、その後の書翰にハンス坊のことがりに出てくるところを見ても充分うなずける。

ところが結婚第三年の１５２７年に、ルターは重症にった。殆ど瀕死に近い病床で、ハンスとその母親ケーテの身の上を案じて彼が嘆いたときに、なケーテは応えて言った、「若しもその事〔召天〕が神さまの心なら、は私と一緒にいらっしゃるよりも神さまのみ許にいらっしゃる方がしうございます。貴方に助けていただかなければならないのは、私やこの子よりもむしろ沢山のキリスト者たちなのでございます。どうか私のことは御心配下さらないで下さいまし」。神信頼のケーテのしっかりした心根とねんごろな愛の看護は重症のルターに大きな慰めと励ましと力を与え、彼は再起することができた。

このような重症の試練を通った同じ秋にこんどはペストがヴィッテンベルクの市をも襲った。選帝侯廷も大学もこの疫病の難をイエーナに避けた。ルターも避難するように侯の勧告を受けたが、彼は「私は羊達〔キリスト者たち〕が、一番私を必要とするときに、彼らを見棄てて逃げる雇傭人とはなりたくありません」といって、病魔がを極めて来てもなお町に踏み止まり、人々の救助のために力を尽くした。ケーテも夫君と共に自分は身重でありながら、市の疫病と戦った。市長夫人まずれ、彼の知人たちの家族が幾人か相継いで仆れてゆく。彼は友人たちに難を彼の家に避けるようにしてやる。そのうちに彼の同じ屋根の下で感染した者が出て来た。このような疫病との戦のさなかで、長女エリーザベツ（Elisabeth）が生れた。それは１５２７年１２月であった。このような苦難の中で、ケーテはまことに頼もしい妻であり、母であった。ケーテがルターにとってどんなに頼もしい妻であったかは次のようなルター一流の卒直な言で充分察せられる。「私はケーテから離れたくない。然り、フランスとヴェニスをもらっても離れたくない」。「神の言の次に貴い財宝は聖なる結婚である。神の最上の賜物は敬虔にして快活で、神を畏れ、家を整う妻だ。このような妻とは平和に暮し得るし、財産も身体も生活もまかせることが出来る」。

折しも南独乙に信仰迫害の事件が起こった。バイエルンの牧師レオンハルト・カイザー（Leonhard Kaiser）はその犠牲となりに処せられた。多分是らの病魔と迫害のあらしの中で詩第46に励まされつつったのが、かの「我らの神は堅き城なり」（《Ein’ feste Burg ist unser Gott》）の讃美歌であったのであろう。この歌の背景として農民戦争のことも念頭にあったと思われる。〔別項「ルターの讃美歌」参照〕

翌１５２８年８月、疫病猖獗時の児として悪条件のもとで世に出たエリーザベツは早くも世を去った。そのときルターは父たる者の心の弱さと苦しさとを経験させられたことを告白している。１５２９年５月に次女マグダレーネ（Magdalene）が与えられた。彼女は姉に替って一家の花の如くであった。１５３１年には次男が与えられ、父と同じくマルティン（Martin）と名づけられた。ルターは三人の子供たちの父となって嬉しく、また彼らを「三王国」であると言っている。

子供らの醸し出すメルヒェンランド（お伽の国）はルター自身にとっても祝福された天国であった。神信頼の深いルターは童心の有ち主であった。ハンスがミルクの川が流れ、白いパンの成る樹の繁っている天国の歌を歌えば、ルターも一緒にその夢の現実に遊んだのである。ルターは幼児の世界を心から慕って言った、「幼児の生活は最も祝福された最も善いものだ。彼らにはこの世の憂きもなやみもない。彼らには教会によく見られる醜い恐るべき狂信や党派根性などがない。死や地獄の恐怖から来る苦しみも知らない。彼らの考えは純で、彼らの想いは楽しいことばかりだ」。神が与えたもう窮極の世界が、美しきものである限り、それはメルヒェンの世界と相通ずるものを何らかの意味で具有していると思われる。子供の空想の世界がいたずらなる空想であるならば、神は何故かくも美しくつくり給うのであろうか。「幼児の如く神の国を受くる者ならでは」とのイエスの言は、幼児の純真な性格的美がとりもなおさず神の国の性格の一反映と見て支障なきを推断させるではないか。幼児が、与えられた現実の美から、空想する美の世界を単純に信じて、それを現実化する信頼深さ！　神の国は此の如き魂に今現じ来たり、後、終末の日に現ずるのである。神の国の門は「信頼」なき魂には残念ながらされているのである。素晴らしい終末の世界の現実が、実は幼児の如き純なる心に、時空を越えて投影してくるのである。これはまた純なる祈りの世界に開示される消息の一端である。

かくも子らを愛したルターは、しかし、決してするような父ではなかった。その昔、厳格な父に育てられたように、また神が厳かな神である限り、ルターも義の一線を揺がすことが出来なかった。幼きハンスすら三日間も父の勘当に遭ったことがある。

１５３３年１月に三男が生れた。彼はこの子を彼の特愛の使徒パウロに因んでパウル（Paul）と名づけた。ルターは自分で勝手に、長男を自分の後継者にしてローマに対する戦士として神学者に、次男を自分が父親に期待されて成らなかった法律家に、三男は気丈者なのでワルトブルクの騎士の如く軍人に育てあげたいとんでいた。しかし神のなし給うところはルターの注文通りではなかった。即ち長男のハンスはむしろ彼の如く法律科を専攻し、成人してプロイセンのアルブレヒト公に仕えた後、ワイマールの高等法院評定官となった。次男マルティンが父の如く神学を研究し、父の後を継ぐと思われたが、惜しむらく三十三で召天した。三男パウルは医学を修め、終りにはザクセン選帝侯の侍医となった。

１５３４年１２月に三女にして末子なるマルガレーテ（Margarete）生れた。彼女は無事に育ってプロイセンの貴族と結婚した。

かつて「黒い修道院」であった建物が、今はこうしてルターのやかな家族の家、学生や旅人や困窮者の宿屋、福音的なキリストの幕屋となった。ケーテ夫人の多忙と活躍は大変なものであった。またケーテを助けてくれた婦人にケーテの叔母にあたるマグダレーネ・フォン・ボーラがあった。彼女もかつてはケーテと同様ニンプシェンの尼僧であった。１５３７年他界するまでルター家のあたたかい援助者として尽くしてくれた。彼女はみんなから「ムーメ・レーネー！」（Muhme Lene!）（レーネ叔母さん）と呼ばれて親しまれた。

# ●次女マグダレーネ

さて我々は最後に可憐な次女マグダレーネについて学ばねばならない。彼女は「レーンヒェン」（Lenchen）と愛称されていた。生い立って愛くるしい少女になった。ある時父親がこの子に、「天国へ往きたいかね」とたずねると、彼女は「往きたいわ。お林檎やお砂糖や梨やが天国では沢山いただけるから」と即答した。ルターは子供の単純な卒直な信頼感からは、いつも逆に信仰のを学んでいた。ところがこの可愛いレーンヒェンが十三歳のとき、重い病気に罹ってしまった。ルターは日夜彼女のため熱祷を捧げた。彼岸の瀬戸ぎわのベッドに父は身を寄せて祈るが如くささやくが如く神と娘とに言った、「この子を本当に愛しているのです。でも神様、このをお召しになろうというのがあなたの御こころなのでしたら、私はよろこんでこの娘をあなたのみ許に在らせたいと思います。マグダレーネ！　可愛い娘よ！　おまえは此処でお父さんのにいつまでも居たいんだね！　でもまたあのお父さまのところへも欣んで往くのだね」。信仰と人情の渦の中からの熱い吐息のような父の言に応えて少女は言った、「ハイ、お父さん、神さまのお思いになる通りに！」。

“Ja, herzer Vater, wie Gott will!”

極めて自然に、純に、信頼深い言が発せられた。これを聴いたルターは深く感動した。間もなく彼女の息は絶えた。ルターはベッドの傍にいた。祈った。涙がしげくった、の上に。父はを両腕に抱いた。マグダレーネは愛する父に抱かれながら、「天のお父さま」のみ許へ往った。埋葬のとき彼は言った、「私は霊においては確かに喜んでいます。けれども肉はそうさせません。あのと別れたことは限りなく私を苦しめます。あの娘はきっと平安の中にあるし、幸であると思うのですが、それでも私がこんなに悲しいのはなぜだかわかりません」。

このルターの切々たる言葉で、想い合わせられるのは、内村鑑三先生がある人に贈られた次の三十一文字である。

　　亡き娘を懐う

そのは父のに安しとは

　　知れども尽きぬ我が涙かな

June 29. 1926　15 years after she passed away.

 内村ルツ子父　鑑三

内村先生も愛娘ルツ子さんを天に送って十五年経っても涙は尽きないと告白しておられる。信仰の告白も本当であり、人情の告白も本当である。信ずればこそ愛惜もし、愛惜もすればこそ信ずるのである。矛盾であって矛盾でない。人生は所詮そういうである。神を信ずる者には勝利の劇となるが、そうでない人にはどういう劇となるか。

（なおここに付言させていただくならば、右の内村鑑三先生の一枚の自筆の紙が信友今橋淳君の書斎に掲げられてあるのを見て私は感動し、これがどうして彼のところにあるかの由来を聞いた。彼は私にその後、これを写真版にして贈ってくれた。そこで私はその写真版を私の聖書集会所に掲げているわけである。）

ここに内村鑑三を想い合わせたのも自然なことである。それは内村鑑三はある意味で日本のルターであるからである。両者の精神史における地位や役割において、また人格的にも類似性があるからである。（第六巻『随想集』の「偉大な野人」「矛盾の偉大さ」参照）

厳に過ぎたルターの父の家庭に比してルター自身は暖かいホームを創った。それはイエス・キリストの愛を体受したからである。ルターは妻を愛し、子らを愛した。彼のパトスは妻の愛よりも深い熱いものであったであろう。父なる神のパトス──これをアガペー愛という──をキリスト・イエスに在って体受することが隣人愛の源泉である。これを知り、そこに生きることを体得し体現したルターは家庭生活そのものにおいても、大切な宗教改革の一環を身証した。いわゆるマイ・ホーム主義では断じてなく、家庭幕屋を旅人の曠野のオアシス（沃地）としたからである。「エホバ与え、エホバ取り給う、エホバの聖名は讃むべき哉」、ルターも乙女マグダレーネを取り去られてヨブと共にこう祈ったにちがいない。彼はおのが死に至るまでマグダレーネを深く憶えていた。彼にとって乙女の死がのこした瘡痕は地上では消えるよしもなかった。

十三歳をとして天上の星と化した地上の花レーンヒェンは、全身的信頼の美しい魂であった。ここまで書いて筆者の眼にも天露が滲み出た。

「私も子供のとき死にたかったと思う。

そのためには此の世で有ち得る名誉などはすべて棄ててよい。」

マグダレーネを愛惜してやまぬルターのこの一言に、人生のやりきれない悲哀を感ずると共に、天国の虹が映ってくる。

二四　ルターとエラスムス

文芸復興（Renaissance）と人文主義（Humanismus）と宗教改革（Die Reformation）の異同について簡単に述べながら、ルターとエラスムスの比較と両者の論争に触れたいと思う。

# ●文芸復興

文芸復興（ルネサンス）はあるがままの人間の自律的な生活感情の目醒めというわけで、商工業の発達を見たイタリアの市民階級の経済的興隆と共にギリシヤ・ローマの古典への文芸方面の復興を契機として拾頭して来た十三世紀頃からの人本主義的文明の興隆であることは人の知る如くである。中世は宗教形態が教権制度（Hierarchie）であり、政治的には封建制度（Feudalismus）であって、市民の生活を他律的に（heteronomisch）律していたわけで、本来自由を欲する人間の根本衝動が、他律の下にいつまでも服しているわけにゆかないのは歴史が語るごとくである。自律的な（autonomisch）生活とその文明への精神的転向の機運がしたわけである。ルネサンスはそのように生活感情が自律的であり、現世的である。

# ●人文主義

また一方、人文主義（ヒューマニズム）なるものは、社会生活が人本主義的な合理的秩序において、理性的に自律的に営まるべきものとして目醒めて来た十五世紀頃からの精神運動である。「人間自身がすべての事物の尺度である」といった表現は人文主義の根本性格を表わすといってよいであろう。それはまた人間の価値と品位を重んずる思想で、ルネサンスは情感の面において、ヒューマニズムは意志と理性の面において人間そのものを尊重する精神的勃興であったといってよいわけである。いずれにせよ、楽天的であり、現世肯定的である。ではあるが、幾世紀にる宗教的なる因子が消え去ったわけではない。その中に宗教感情が本然のすがたで生かされたところに、あのイタリヤの文芸復興期のたる不滅の芸術が花咲いた。ダンテ（Dante 1265-1321）、ペトラルカ（Petrarca 1304-1374）、ボッカチオ（Boccaccio 1313-1375）、ミケランジェロ（Michelangelo 1475-1564）、ラファエロ（Raffaello 1483-1520）等はその代表的芸術家であった。〔ダンテについては第二巻『芸術のたましい』に詳論してあるので参考されたい〕。同様に人文主義においても宗教的要素が否定されたわけではない。この方面の第一人者が即ちオランダはロッテルダムのエラスムス（Desiderius Erasmus 1469-1536）である。

# ●エラスムスとルター

そこで我々は今やエラスムスの人物とその思想に触れながらルターとの異同を見ようと思う。それはやがて人文主義と宗教改革の異同ということであろう。何となればエラスムスとルターはこの両面における代表的人物、双璧であるからである。

エラスムスは、史上の彗星的人物の一人──多分牧師による優れた私生児である。そのためであろう、彼は正に他律的に修道院生活をさせられた。ルターは人間的他律ではなく、天的他律によって修道院に入ったことは既に見た如くである。エラスムスは現実の修道院批判から人間的自律の方向へ意志的に動いた。ルターは天的他律に人間的自律を以て応じようとしたが、その不可能なことを知って天意に降参した。すると逆に本当の自由を得るに至った。同じく修道院に入りながら、その入り方とその中における体験の仕方に両者の相異が既にあらわれたと言ってもよいと思われる。

エラスムスは１４９５年以来パリ大学に学んだが、そのスコラ哲学と修道院的な厳格主義に対して批判的となった。彼の人文主義がパリ大学時代に確立したことはその時代の著作に明らかである。やがてイギリスのジョン・コレットの影響により、彼は美学的な文献研究から神学へ移行した。その頃の顕著な著作は『キリスト教軍人便覧』（《Enchiridion militis christiani》）という本である。実に立派な含蓄のあるラテン文で書かれている由である。その論旨とするところは、宗教祭儀、無味乾燥な教理などは、キリストの意に反するもので、隣人のためにおのれを棄ててかかる愛を以て生きることが大切で、イエスの精神に帰れ、というのである。キリスト者はキリストの兵士らしい服従と奉仕の精神で生きるべしというのである。

彼は勿論多くの著作をしているが、エラスムスの思想はおよそ次のようなものであると謂われている。即ち、彼はキリストの福音を実践せんとする実存的思惟に基づいて論じているのであって、思弁的、抽象的なものを嫌う。トーマス・ア・ケンピスの『イミタチオ・クリスティ』（『キリストに倣いて』）が神秘主義的情感による実存主義とするなら、エラスムスのはむしろトルストイが『山上の垂訓』を宗教的道徳の規準として実践せんと努力したように、キリスト信仰を土台とした自律的な自由意志を以て宗教道徳を実践せんとする宗教的実存主義といって可いようである。キリストは唯一の教師であり模範であり、敬虔の原体であり、生活の規準であり目的である。

エラスムスには、キリストの十字架は「私のための」犠牲的な愛ではあるが、パウロやルターの如き「私に代って」死んだ贖罪の愛にまで徹底していない。「神の似姿」（Imago Dei）としての人間は、信仰を土台として自由なる意志を以て、「神の似姿」にふさわしい生き方をすべきであるという。「神の似姿」の本質を聖霊によって信受する使徒的信仰とはちがうのである。

エラスムスは宗教改革に対して接線的関係に位置してはいるが、人文主義の殼を突破しなかった。勿論現代の文化人よりはるかに宗教的ではある。

# ●「自由意志論」と奴隷意志論

ルターとエラスムスの最も明瞭な差違は、「自由」をめぐっての論争においてあらわれた。エラスムスは１５２４年９月に『自由意志論』（De libero arbitrio）を発表して、「我々は先ずここにおいて思うに、自由意志とは、永遠の救いへと導いてくれる諸事態へと、おのれ自らを向けることのできる、またはそのような諸事態に対して背を向けることができる人間の意志の力（Vis humanae voluntatius）である」と定義した。エラスムスの自由意志論に対して、ルターは翌１５２５年１２月に『奴隷意志論』（De servo arbitrio）を著して反論を展開した。彼は神の言葉、キリストの救いに対して応じたり、拒否したりする力を認めることの不可能なことを論じた。要するに神・キリストの恩恵の力によるのでなければ人間は何もできないこと、人間の意志からは何もまことに善なることのなし得ぬことを論じた。これはそれより以前アウグスティヌスが『自由意志論』において恩寵主義に立って論じた系統をいで更に徹底したものである。アウグスティヌスに反対の立場に立ったペラギウスの系統がエラスムスということになるわけである。